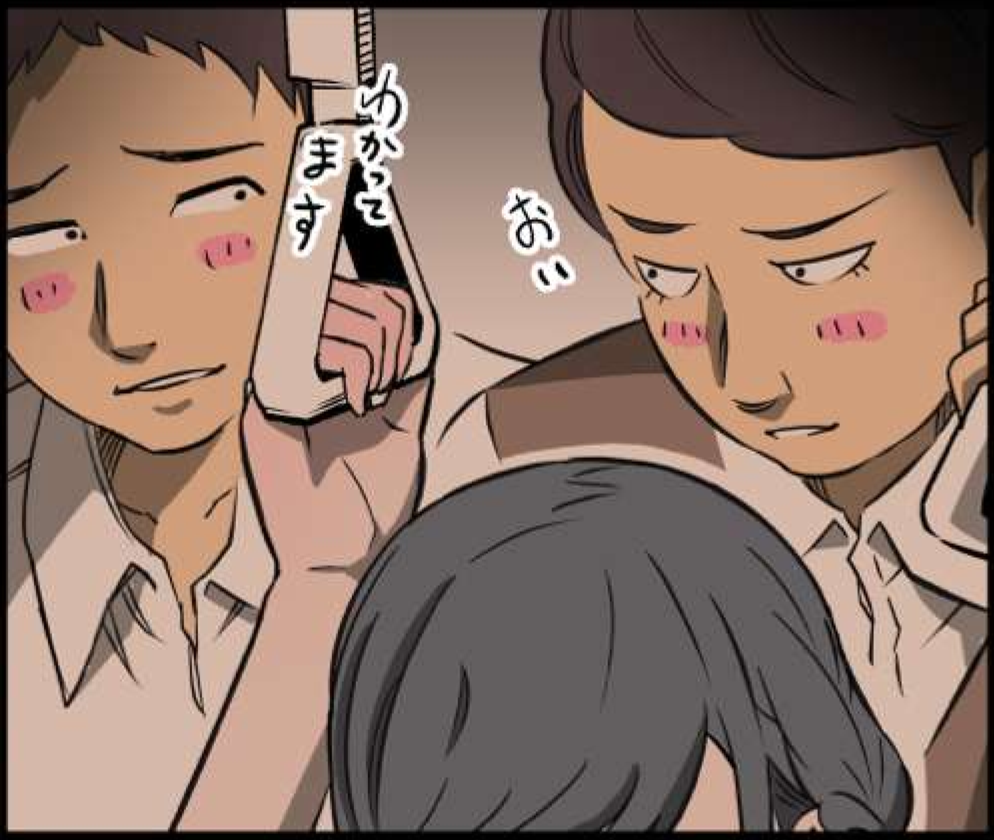
雨の水曜日。午前10時。
住宅街のバス停に、
駅方面のバスを待つ少女が一人たっていた。
少女にとって、いつもと同じ光景だった。
少女の後ろに股間を膨らませた男が10人並んでいる以外は。

通勤通学ラッシュの終わった
平日のこの時間に、このバスにのる人間が
こんなにいたことはいままでになかった。
だが少女は特に気に留めていないようだ。
降り続く雨を物憂げに眺めている。
少女の名は、天[redacted]菜。天候を操る潜在能力を秘めている。
この前、青空を見たのはいつだったろうか。
この雨はもう何ヶ月も降り続いている。

痴漢リーダーの談話
「彼女はいつものようにバスに乗り込んできました彼女はいつもこの時間に、
このバス停からバスに乗り、駅前のマク[redacted]ナルドに出勤することを私たちは
調べあげていました。
そしてメンバーと待ち合わせ、彼女に続いて乗り込み、
他の乗客からは見えないように取り囲んだのです。
恥ずかしながら私たちは全員、もうビンビンになっていました…。」

ザアアアアア
プシュウ
キュ
ザー
伊亜バス
ブロロロロ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ブロロロロロ

いつものように少女はバスに乗った。
男たちは少女を取り囲むように乗り込んだ。
少女は思った。
(混んでる。
やだなあ、ただでさえ蒸し暑いのに。
早くつかないかな)
少女が降りる終点のバス停まで、所要時間20分。
男たちが目配せをしている。
リーダーらしき男が低い声でささやいた。
「一同、われらの目的と掟をもう一度思い出せ。」
ほかの男たちが低く、だが確信にみちた声でささやきかえした。
「一つ、決して処女膜をやぶらないこと。」
「二つ、決して肉体的苦痛を与えないこと。」
「三つ、決してチンポを挿入しないこと。」
「四つ、必ずイカセルこと。」
エンジン音にかき消されて、少女にはなにも聞こえていなかった。



痴漢リーダーの談話
「私たちは世界で一番やさしい痴漢グループです。
決して少女に痛みを与えることはありません。
ただただ快感におぼれていただき、そのリビドーを開放すること。
よりよい人生を歩むきっかけを作ってさしあげたい。
心からそう思っているのであります。」

バスの揺れに合わせて、
リーダーが少女に体を押し付けた。
リーダーは揺れに合わせて
手の甲で少女の臀部をさすりだす。

(?!)

少女はとまどっている。

(わっわざとじゃないよね?
…混んでるからしかたないんだよね…?
早くつかないかなあ。
きもちわるい…)

痴漢リーダーの談話
「最初はバスの揺れに合わせて体を押し付けました。
手の甲で彼女のお尻をさすり、彼女の反応を見たのです。
そのときはまだ私が痴漢だとは確信を持てずに戸惑っていました。
そして私は彼女の尻の割れ目に手を滑り込ませたのです…」

スス
クニ
ビクッ
ぐぐっ
クニクニ
クニクニ
ちょっと‥!
ドッ
ガッ

リーダーは手を、少女のおしりの割れ目に少し力をこめておしこんだ。
指を細く伸ばし、尾てい骨から肛門のあたりをまさぐるように手を動かす。
バスのゆれに合わせて縦に揺らす。

すりすりすりすり。

こしこしこしこし。

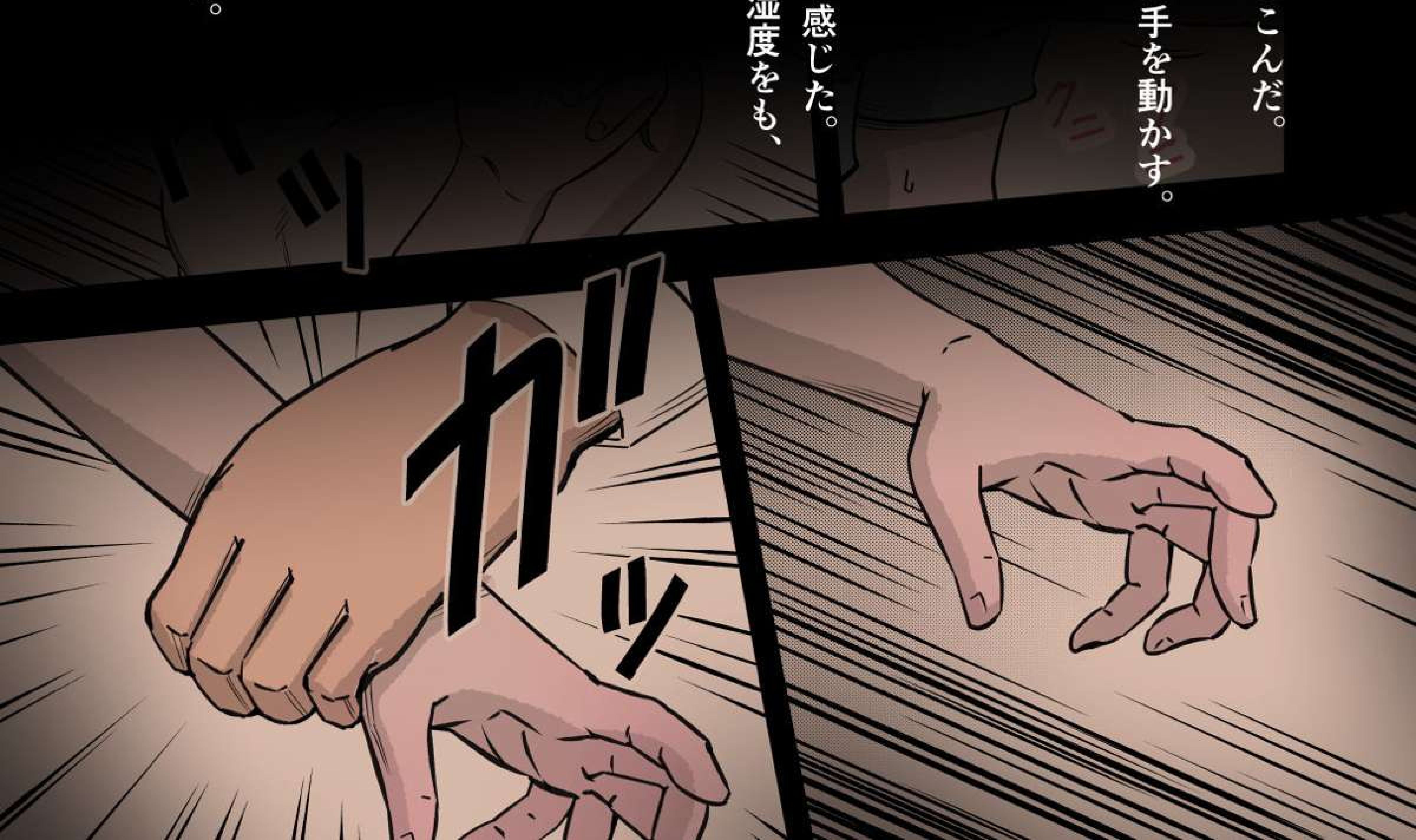
リーダーは指先に、少女の短パンごしに下着の縫い目の凹凸を感じた。
そして、少女の体温と、ごくわずかな湿り気ともいえぬほどの湿度をも、
指先に感じたと思った。
しかしそれは、興奮ゆえの錯覚、妄想かもしれない。

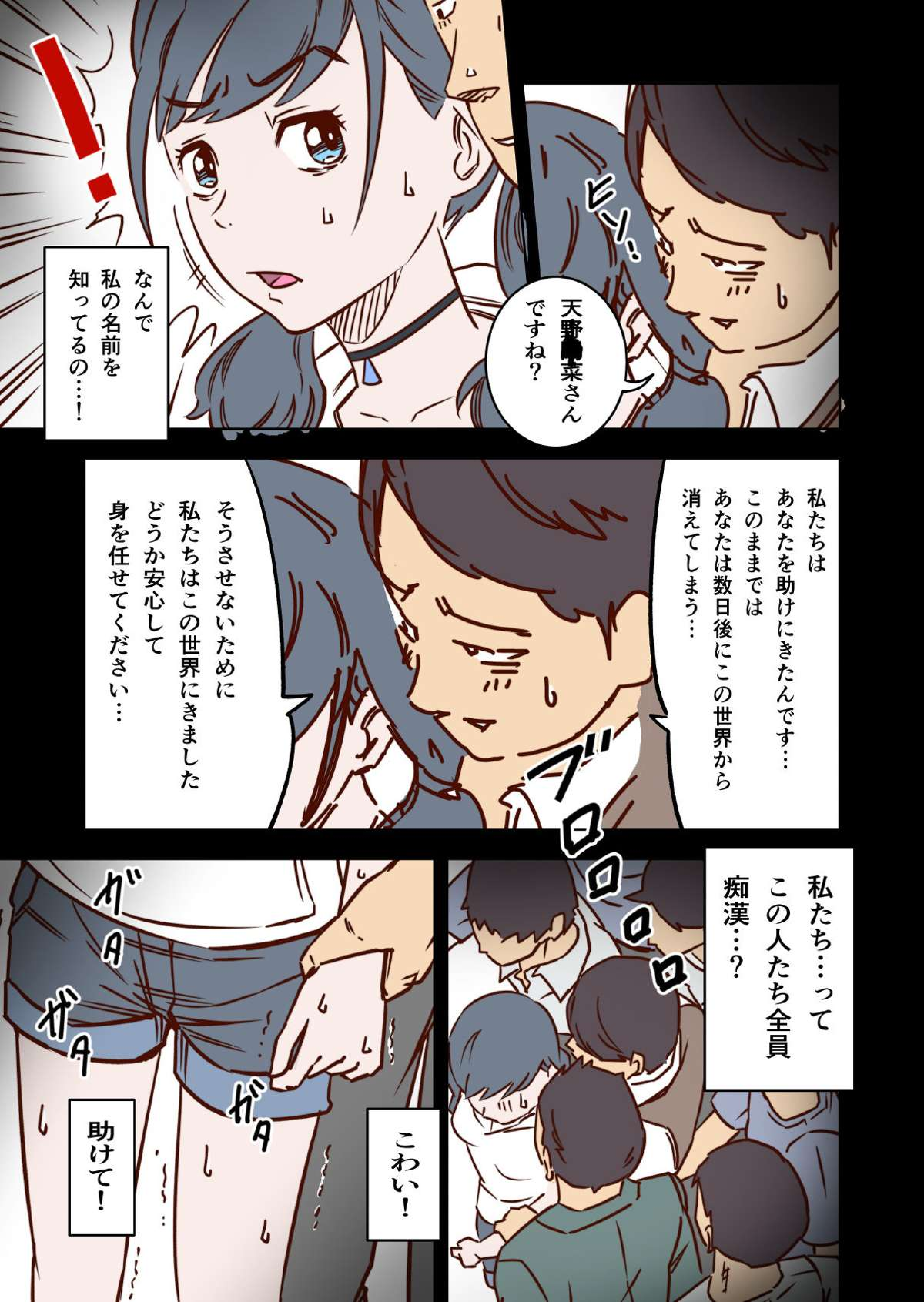
少女は気づいた。

（…？　おかしい！　痴漢だ！）

恥ずかしさと怒りで少女の顔は一瞬で赤くなった。

少女はおしりに手を伸ばし、見知らぬ男の手をつかもうとする。
しかしリーダーはすばやく逆に少女の手首をつかんだ。




ヒソ…
天野[redacted]菜さんですね？
なんで私の名前を知ってるの…！
私たちはあなたを助けにきたんです…このままではあなたは数日後にこの世界から消えてしまう…
そうさせないために私たちはこの世界にきましたどうか安心して身を任せてください…
ブロロロロ
私たち…ってこの人たち全員痴漢…？
ガタガタガタ
こわい！
助けて！

少女はリーダーの言葉に戦慄した。
この男は自分の名前を知っている。
少女は精一杯の大声をあげて助けを呼んだ。

「助けて！　誰か！」

バスの中には運転手のほかかに、
若い男性や買い物中の
主婦らしき人が数名乗っていた。

「誰か警察を呼んでください！」

いかに無関心な都会といえども、
なんらかの反応があるはずだ！

ゴー
…どうして
ブロロオ
ブロロ
ゴトン
誰も何も…
反応がない…!
驚いているね。
無理もない
われわれの技術はまだ
存在しないものだからね。
フル
フル
でも君にはあえて
説明しないよ。
恐怖と混乱の中で
性の快感に
目覚めてもらおう。
それが君のためなんだ。
ゾク
ゾク
しかもそこに乗っているのは
「彼」なんだよ。
まだ君たちは
お互いを知らないんだね。
ブロロロ
ゾク
ハア
ゾク
ハア
ハア
ゾク
ハア
ハア

少女の叫び声は、バスの車内の誰にも聞こえなかった。
少女には何がおきているのか理解できなかった。
不快。恐怖。混沌。
ひざが震えだした。気を抜くと失禁してしまいそうだった。
それは、リーダーを取り囲む男たちが服の中に隠し持っている「ある装置」の力だった。
アクティブ消音。
少女の声の波形に、逆移相の波形を重ねることで音を消してしまう技術。
この時代にも存在する技術ではあるが、このように叫び声を完全に消し去るほどの性能を持つ装置はまだない。
少女がいくら叫ぼうと、わずか数メートルの場所に座っている白いTシャツの少年には全く聞こえない。
そしてこの少年と少女が出会うのはこの数日あとであった。

ハァ ハァ
ハァ ハァ
えっ!?
ガッ
がッ
バッ
ビン ビン
ハァ ハァ ハァ
サッ
サワワ
ほんとにやめ…!
ヤダッ
ビクン
くに くに
ブニィ
うそっ

ほかの男たちが少女の両手を拘束した。
リーダーは少女の白いパーカーの裾から両手を入れた。
少女はパーカーの下にタンクトップを着けていた。
その下にはまだ膨らみの薄い乳房を包んでいるブラジャーがあった。
リーダーはブラにそっと手をそえた。
ブラの綿の手触りを楽しむようにそっと、こすり、さする。
やわらかい弾力を布の下に感じる。

ふにふにふにふに。

少女の乳首は嫌悪と恐怖におののいている。

「かわいそうに、僕が立たせてあげるよ。」

リーダーはブラの上から、乳首を痛みを与えぬようやわらかく人差し指でころがすように刺激した。
数十秒、乳首の弾力を指先で楽しんだ。

そしてリーダーはブラの下から、骨太の指を、するりと忍ばせる。
ブラの内側は、車内の熱気と少女の冷や汗で湿っていた。

リーダーの談話
「私はついにパーカーをたくし上げました。彼女はカップの薄いスポーツブラをしていました。年ごろの女子にしては無防備で色気のない下着でしたが、彼女は弟との生活のために節約しているのに違いありません。しかしそのおかげで乳首の形がくっきりと透けていました。
細い体つきなのに少し大きめの乳首が…。私はもう我慢できずに乳首をこねくりまわしました。」

コネ
コネ
コネ
コリ
コリ
あっ
ビクン
なんでこんなことっ…!
誰にも見られたことないのに…!
やっ
やっ
ビクン
やっ
ビクン
もじ
もじ
コリッ
ムクムク
かちかちに勃起しましたよ…!
ムクムク
コリッ
コリ
やっ
もじ
もじ
ぼっ…してない…っ!

リーダーは少女の乳首をじかに
やさしく円を描くようにさする。
時にはそっとつまむ。
少女は身をますますこわばらせた。

「う…うう…やめてぇ…」

知らない男に、敏感な部分を触られる生理的嫌悪。
しかしリーダーの指先はその無骨さに似合わず、
壊れ物をさわるかのように
繊細に少女の乳首を愛撫した。
少女の乳首は彼女の意思とは関係なく充血し、
ふくらみ始めた。

「…ん…ふう」

ついに少女の唇から
ため息のようなかすかな吐息がもれた。

「気持ちいいんだね？　硬く膨らんできたよ。
君の乳首が勃起しているよ。
処女なのに。男なんか興味ないって顔してるのに、
身体の感度はいいんだね」

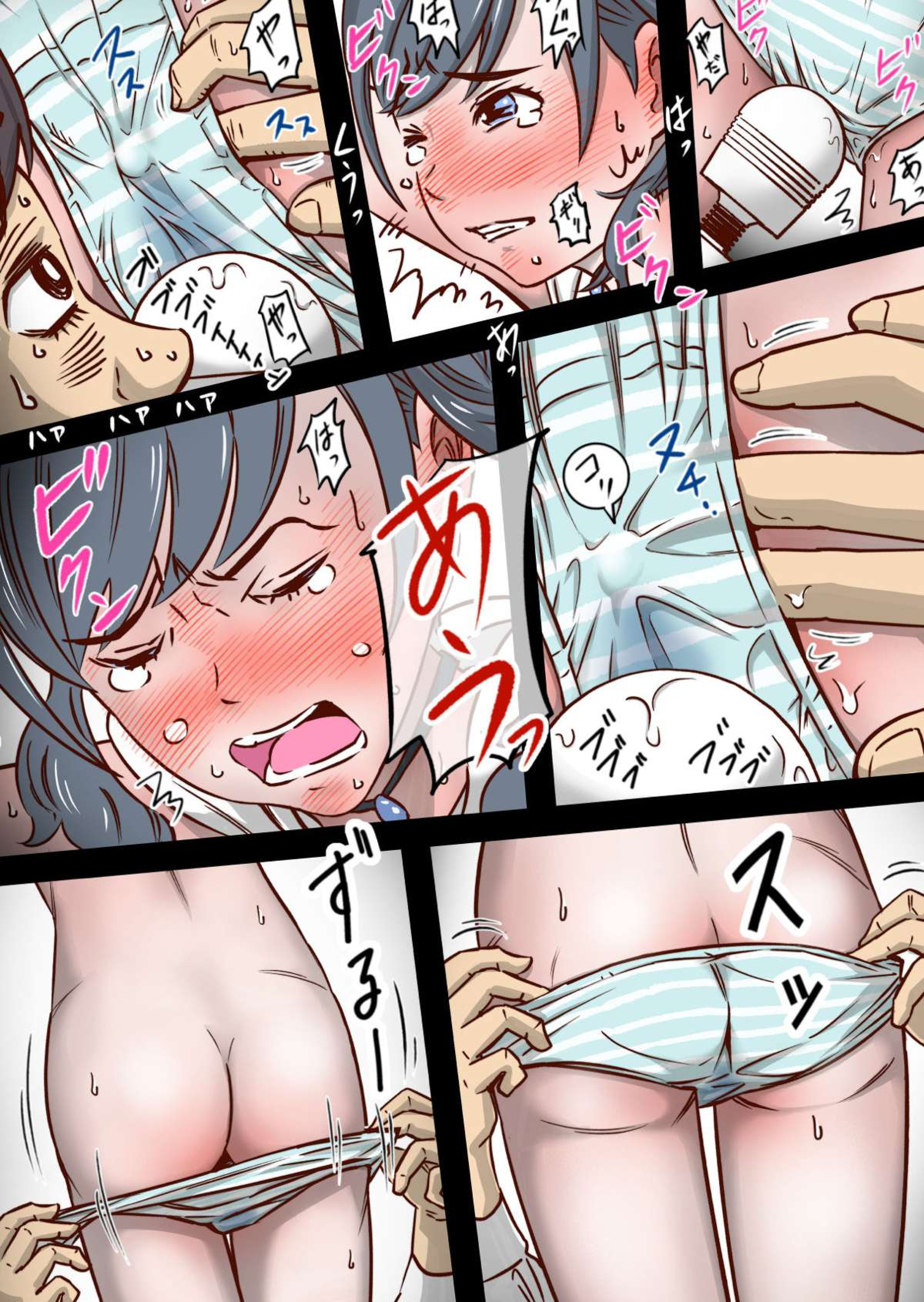
「気持ちよくなんかない！」
少女は必死に否定した。

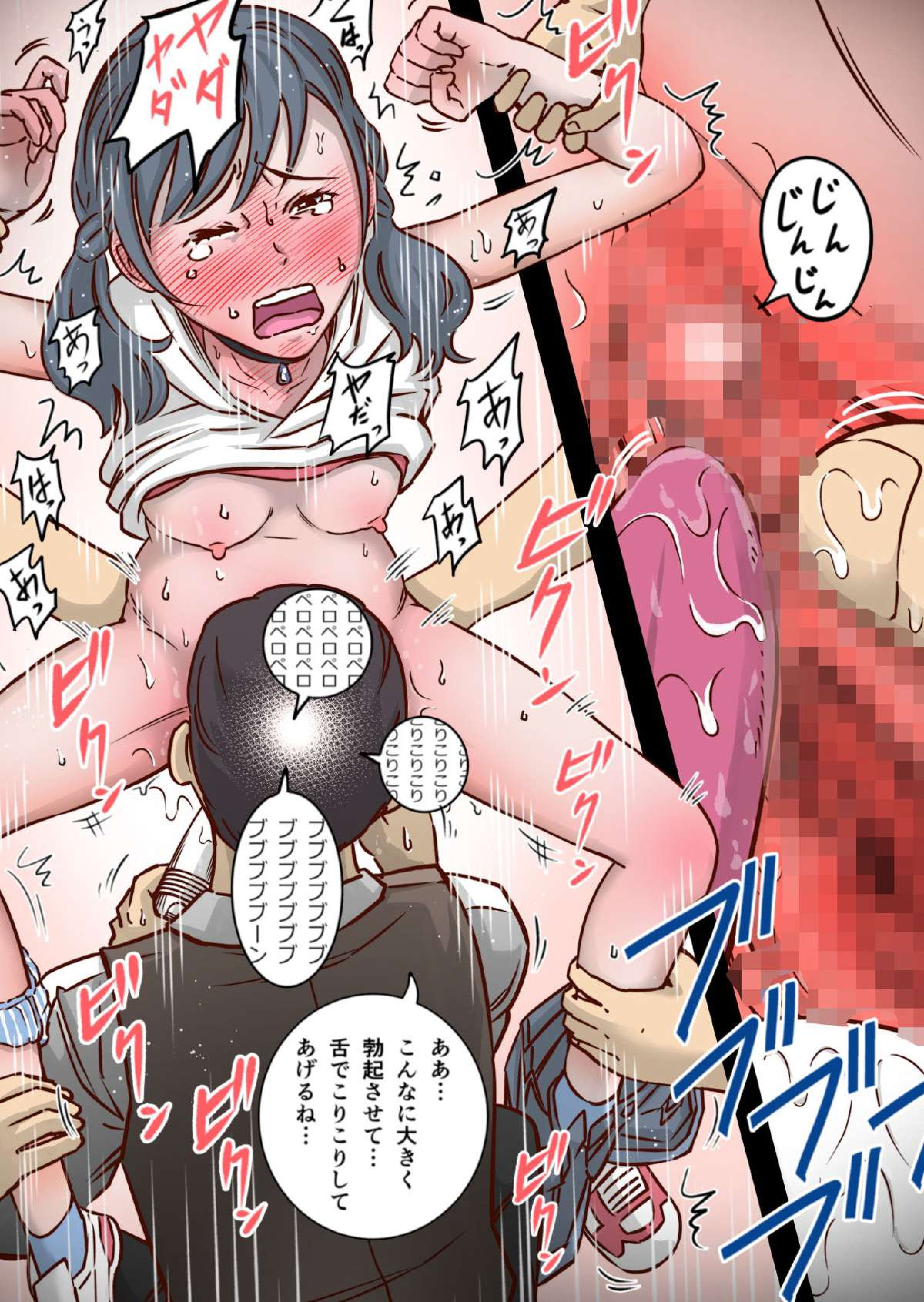
「そうかい、じゃあ仕方ないな。これを使うしかないか」
リーダーはつぶやきながら、
内ポケットから何かを取り出した。
それは見た目は変哲のない普通の電動マッサージ器だった。
しかし中身は少女の身体的リズムに
絶妙にシンクロした振動をAIが自動で
つくりだす未来のマッサージ器だった。

「君にはもう一つ、
硬く硬く勃起する部分があるんだよ？
知ってるかい。クリトリスっていうんだよ。」

「安心して…。
これで感じない少女はいないんだ。
君は気持ちよくておしっこを
もらすかもしれないよ。
もし、おもらしたら僕が全部飲んであげるからね」
「…きもちわるい！　変態！　やめて！」

ズザァ
!?
ぴと
ブゥゥン
やっ
ビクゥッ
だめっ
あっあっあっ
なにこれっ
ブーン ブゥゥン
ビク
ビク
ビク
ビク





少女はいまや両手両足を男たちに拘束されて
カエルのような格好で中に浮いていた。
恥ずかしさに涙がとまらなかった。

少女の性器はまっかに充血して、中心からとめどなく愛液を分泌していた。
包皮からクリトリスの一部が顔を覗かせていてる。
「こんなに勃起させて…・！　なんていやらしいんだ」
リーダーは少女のクリトリスにその長い舌をのばした。
「そんなところっ…なめないでっ」
少女はいやいやと身をくねらせたが、どう力を入れても
リーダーの舌からクリトリスを引き離すことはできなかった。

はー
ヌロ
はー
ハァハァ
!?
ベロ
ベロ
ベロ
ズロロロ
あ
ロロ
あ
ビクン
かはっ
ぞぞんぞ
ビクン
あー
ビクン
ビクン
ビクン
ガクガク
ガクガク
ぐぅ
ブ

「最後の仕上げといくよ」
リーダーは長い舌を少女の膣に差し入れた。
この長い舌こそ彼がグループのリーダーである特質だった。
別の男が少女の乳首をもてあそびながらささやいた。

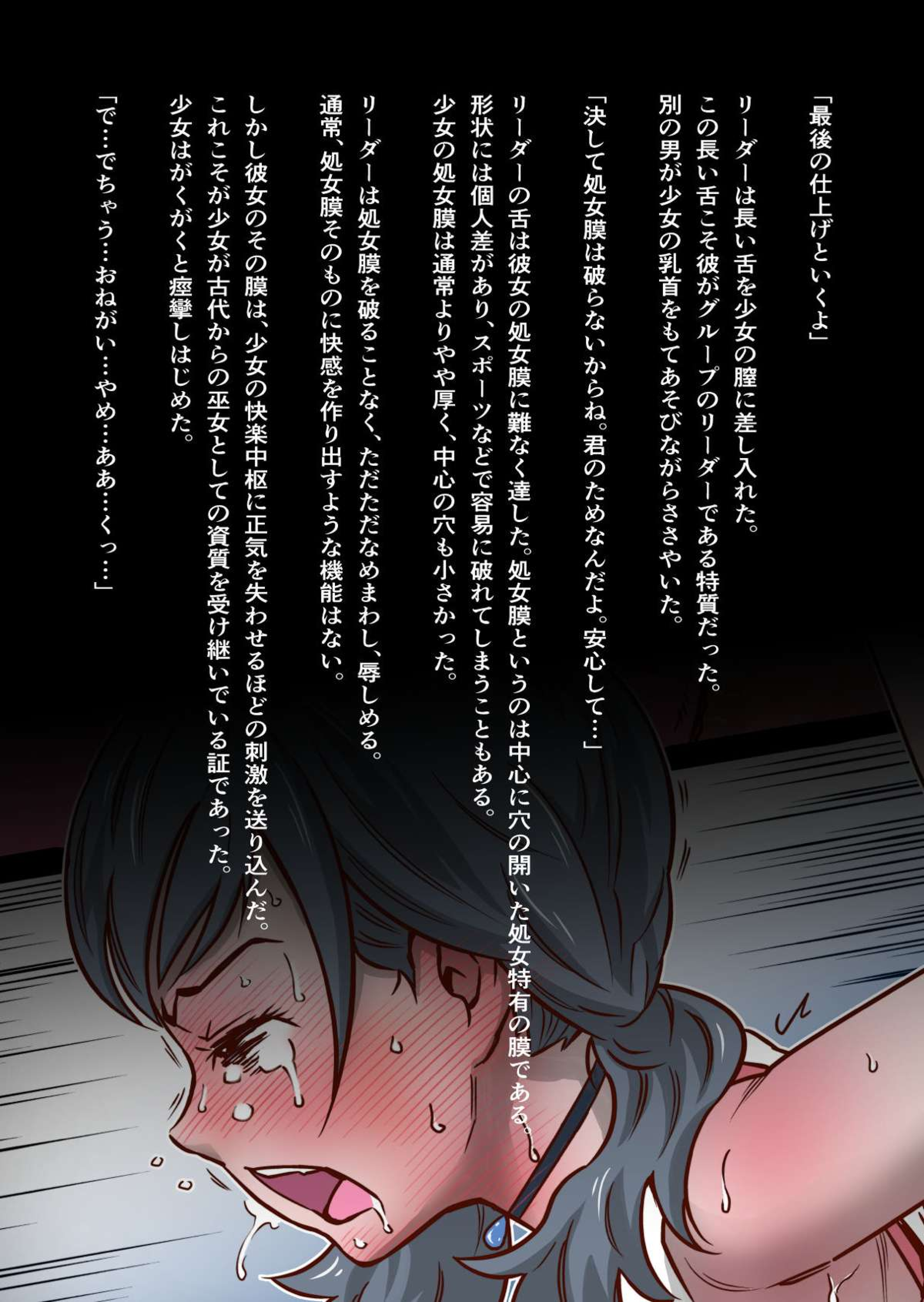
「決して処女膜は破らないからね。君のためなんだよ。安心して…」

リーダーの舌は彼女の処女膜に難なく達した。処女膜というのは中心に穴の開いた処女特有の膜である。
形状には個人差があり、スポーツなどで容易に破れてしまうこともある。
少女の処女膜は通常よりやや厚く、中心の穴も小さかった。

リーダーは処女膜を破ることなく、ただただなめまわし、辱しめる。
通常、処女膜そのものに快感を作り出すような機能はない。

しかし彼女のその膜は、少女の快楽中枢に正気を失わせるほどの刺激を送り込んだ。
これこそが少女が古代からの巫女としての資質を受け継いでいる証であった。
少女はがくがくと痙攣しはじめた。

「で…でちゃう…おねがい…やめ…ああ…くっ…」



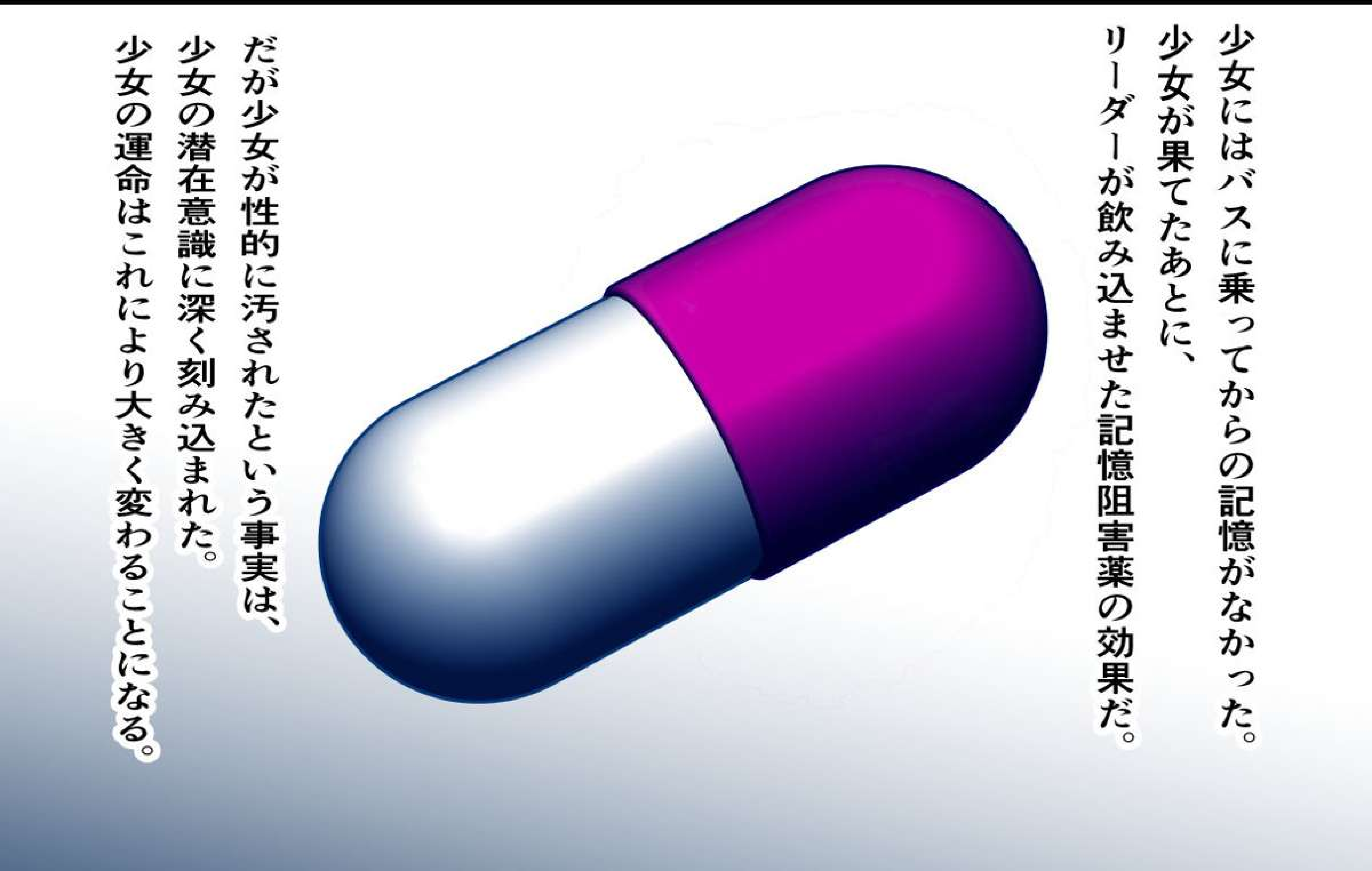
少女の腰が本人の意思とは関係なく、かくかくと激しく前後に動き出した。
それが少女にはとても恥ずかしかった。
膀胱から尿が彼女の意思と関係なく噴出した。我慢できなかった。
全身にびりびりと電気が走る。
それは快感というにはあまりにも強烈だった。
その瞬間、少女はすべてを忘れた。時も場所も自分の名前すらも。
リーダーは少女の小便をごくごくとのどを鳴らしながらのみこんだ。
そして一滴もこぼすまいと必死に尿道を吸う。

「はっはう…はう…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ」

少女の声はもう言葉にはならない。
少女は失禁しながら果てた。
この感覚がイクということだと、少女は知らなかった。
絶頂に達したあともたくさんの男に尿道を吸われ、
愛液まみれのクリトリスをこすられ、
乳首をこねられ、膣口を電動マッサージ器で刺激された。

少女の意識は快感と屈辱で消し飛んだ。

少女が気づいた時、
バスは無人だった。
？


少女にはバスに乗ってからの記憶がなかった。
少女が果てたあとに、
リーダーが飲み込ませた記憶阻害薬の効果だ。
だが少女が性的に汚されたという事実は、
少女の潜在意識に深く刻み込まれた。
少女の運命はこれにより大きく変わることになる。

少女の着衣には全く乱れがない。
「あれ…。いつの間に寝ちゃったんだ私。」
少女はつぶやいた。時計を確認し、まだバイトに間に合うと分かり安心した。
少女はバスを降り、人ごみのなか駅の方へと歩いていった。
雨は降り続いている。

かつての巫女たちは男と契りを交わすことで、その能力を失ってきた。

痴漢グループのリーダー浅岡健也は２０５０年の世界の大学で文化人類学を専攻している。
東北でのフィールドワーク中にある古文書を発見し、処女膜を破ることなく、処女膜を汚し巫女の力を失わせる術をみつけたのだ。
そして、未来から少女を救いにきたのだった。

すべての次元世界の「巫女」のリビドーを解放し、その悲惨な責務と運命から解放すること。
それが自分の使命だと浅岡は信じている。

朝岡は、いま一人目の少女の存在を救った。

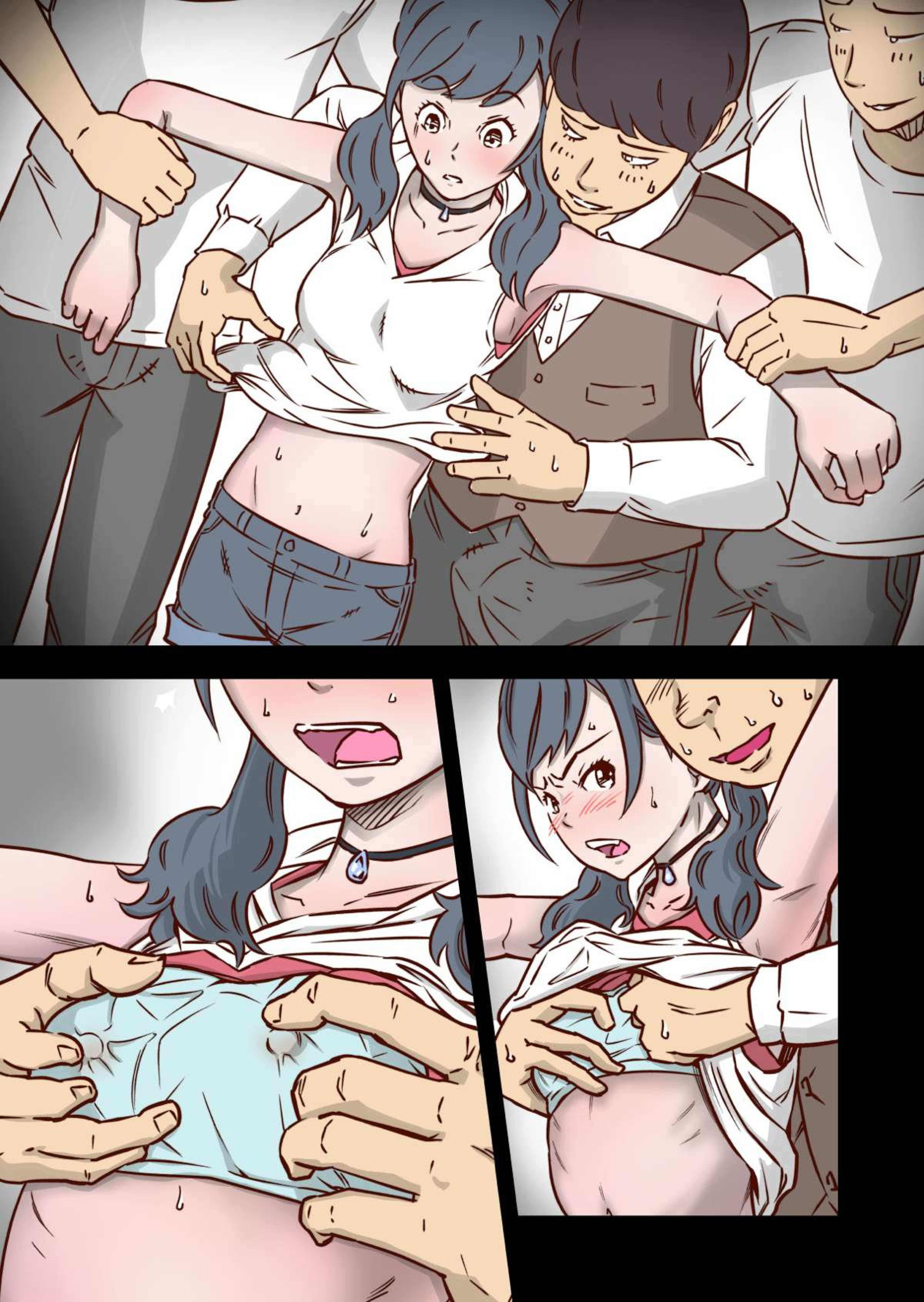
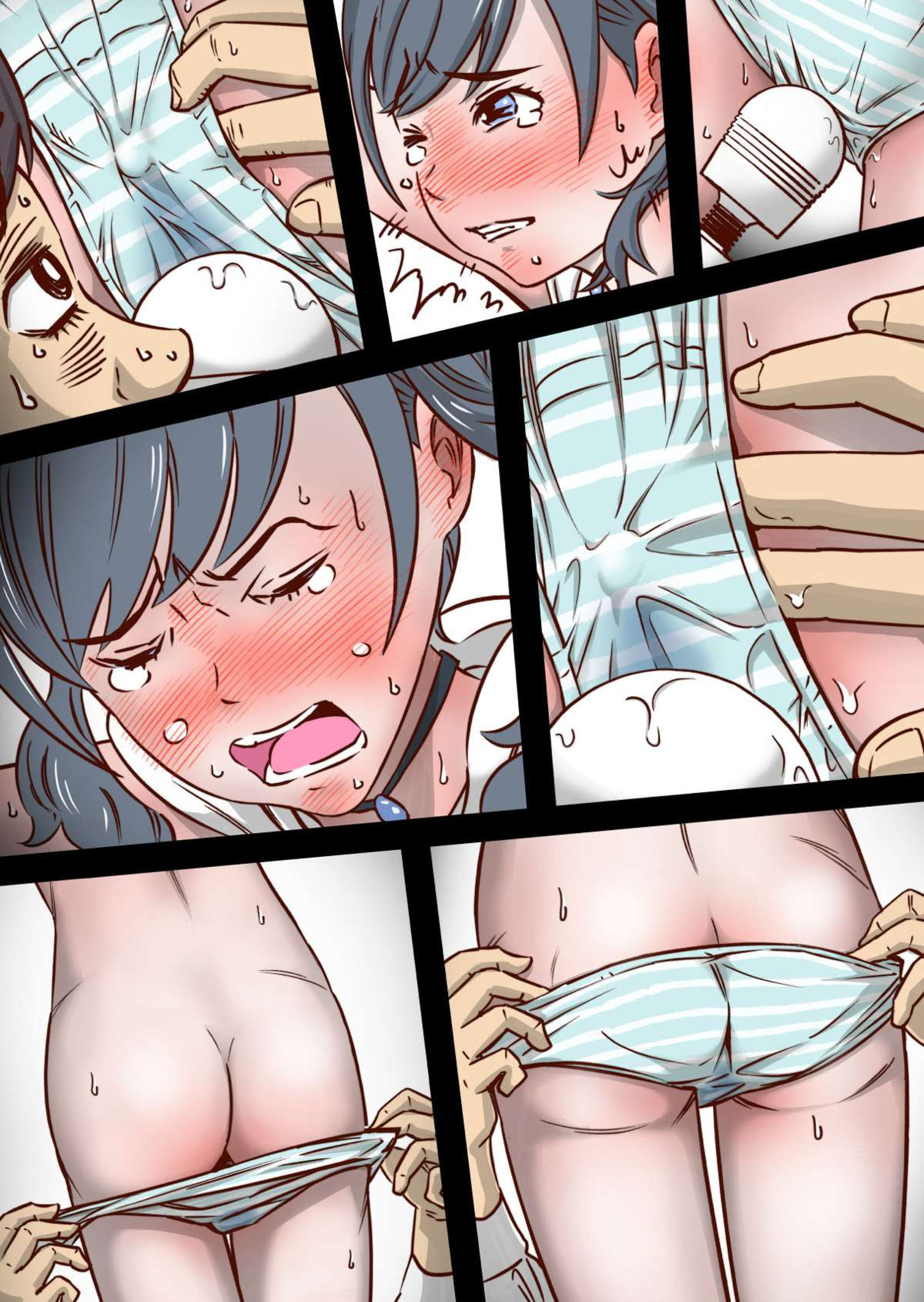
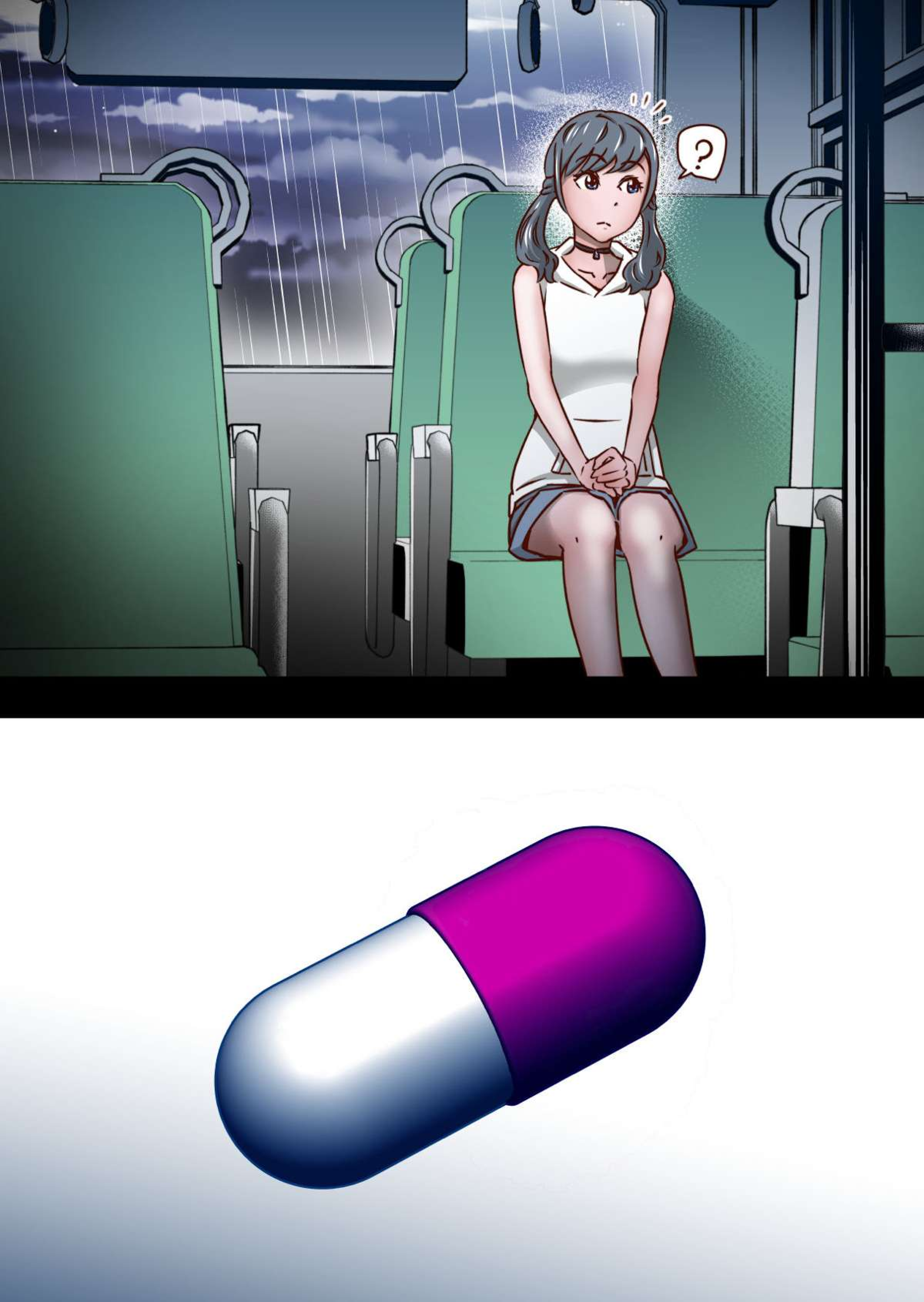
そして処女膜は少年のために残されたのだ。
雨が降り続くこの世界で、いつか白シャツの少年と少女は真実の契りをむすぶであろう。

終

はー
はー
バイトに行かないと…っ
クビになっちゃ…
はー
はっ
やぁ
あっ
ビクビク
ビクビク
あっ
あー
クチュクチュ
ブルルル
ブルルルル
はー
はー
ブルブルするのやめてええ…っ
ブルルル
ブルルル
おがじくなるがらっ
あー
ガクガク
ガクガク
ポタポタ
よく分からない世界で触手に捕まってしまうEND
オマケ.

Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.
※無断転載、無断アップロードを禁止いたします。痴漢は犯罪です。

[天〇の子をバス痴漢で失禁絶頂させた私の理由]
作者・海野秋穂　発行・North Tail
Twitter [@uminoakiho]
2019年9月発行

伊西バス

フル
フル
ゾク
ゾク